The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語動詞の意味の抽象化過程 : イク・クル・ミルの意味分析を中心に
Author(s)	由井, 紀久子
Citation	大阪大学文学部紀要. 1996, 36, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5135
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語動詞の意味の抽象化過程

——イク・クル・ミルの意味分析を中心に——

由　井　紀久子

キーワード：意味の抽象化　補助動詞　～テイク　～テクル　～テミル

0. はじめに

日本語には本動詞に対して～テ形式の補助動詞用法を持つ動詞があり，本動詞とは違った意味の相を示している。例えば，次のようなものである。

（1）　a．ペンを机の上に**置く**。
　　b．来月の試験のためにペンを買っ**ておく**。

動詞オクはさらに次のような用法も持つ。

（2）　第1会議室**において**面接を行います。

（1 a）の本動詞は空間的なペンの移動を表すが，（1 b）は「あらかじめ～する」を表し，（2）は場所を示している。同一形式オクが具象的な意味から抽象的な意味まで持っているのであるが，このような意味の抽象化過程は他の動詞にも見られる。例えば，ヤル・クレル・モラウ・シマウ・ミル・イル・アル・イク・クルは補助動詞用法を持つ。また，これらと平行した現象に形容詞ホシイもあげられる。～ニオイテのように，自由形態素である動詞のカテゴリーから脱して拘束形態素である別の文法的カテゴリーへ転換することを「文法化(grammaticalization)」と呼ぶが，Antoine Meillet が1912年に唱えて以来（Hopper and Traugott 1993），近年認知言語学的アプローチのもと再び取り上げられるようになった。それにつれて「文法化」という用語も言語に見られる過程を指すだけでなく，研究のアプローチをも指すようになった（同掲書）。文法化現象は当然日本語だけでなく各言語に見られる。英語では例えば次のような文法化の例がある。

（3）　a．I am **going** to go abroad.
　　b．I **have** finished my work.

これらはそれぞれ，*go*（行く）が助動詞となり *be going to* 形式で近未来を表し，*have*（持つ）が *have V-ed* で完了を表している。ここで日本語と対比させてみると，日本語もイクは〜テイク用法を持っているが，モツには補助動詞用法としての〜テモツがない。これは *have* に対応する日本語を考えてみるといいだろう。

（4） a．I have three children.
　　 b．私には子どもが3人いる。

（4 b）イルについては（5）の用法〜テイルがある。

（5） 雨が降っている。

文法化しやすい語は言語によって異なり，それはより基本的な語とまずは言えそうである。

言語は世界を分節するという考え方（Sapir 1921）がある。これに従えば，非日本語母語話者が日本語を学習する際，日本語による世界の分節のしかたを習得するとも言える。英語の *have* と日本語のモツは「物を手でつかんだりして保っている」「所有する」の意味においては意味のズレはないが，（3 b）（4）では一致しない。日本語学習者にとってある言語形式を習得する際にはその語が分節する意味世界を正しく把握しなければならない。正しく把握するためには語が比喩的用法などにより拡張された，すなわち抽象化された意味まで含めて学習することが有効であろう。

日本語補助動詞はその名が示すとおり，否定やテンス等の接辞との連接が可能なので動詞のカテゴリーから完全に脱しているわけではない。しかし，意味的には本動詞の意味が希薄化（Givón 1979）した様相を呈している。本稿の目的は日本語の動詞が本動詞から補助動詞へと意味が抽象化する連続体の構造を明らかにすることであるとともに動詞の意味の抽象化過程の本質を探ることでもある。これによって日本語の意味の抽象化過程の方向性，すなわち認識の拡がりの方向性の傾向が見え，将来的に他言語と対照する際の基本になろう。

以下，意味分析についての基本的な考え方をまとめ，次に具体的な語，イク・クル・ミルの分析を行い，その他の語とあわせて意味の抽象化過程について考察していきたい。

1. 文法化の意味論的分析について

文法化現象は様々なレベルから分析可能である。意味論的には具象的意味から抽象的意味へ・語彙的内容から文法的内容への言語的変容，運用論的には運用論的機能から統語的機能へ・テキストでの低頻度から高頻度へ，形態論的には自由形から接語形へ・接語形から拘束形へ・合成語形から派生形へ・派生形から屈折形へ，更に音声的には完全形から宿約形へ・

宿約形から分節地位の消失への変容が，文法化の結果引き起こされる（Heine, Claudi and Hünnermeyer 1991）。以下，本稿では具象的意味から抽象的意味への過程を扱うが，まず，分析のしかたとその前提となる考え方を示しておきたい。

1.1 意味分析の前提

「意味とは何か」を論じるのは本節の目的ではなく，また，この問題を論じきるのは到底不可能であるので，ここでは意味分析の際，前提となる意味についての考え方を示しておきたい。本稿ではまず「形式が意味を規定する」という前提で分析を行いたい。意味が形式によって規定されることを意味論の入門書にでてくるお馴染みの「明けの明星」と「宵の明星」で示すならば，「明けの明星」と「宵の明星」は，指示対象は同じ「金星」である。前者と後者の意味を同じと考える場合は，形式が意味を規定しているのではなく，「金星」という存在物，すなわち指示物が規定していると考えている。しかし，「明けの明星」と「宵の明星」は違う意味だとも考えられる。この場合発話主体は両者を違った認識で，すなわち「夜明けの金星」と「日暮れ後の明星」と捉えていると考えられる。これを文レベルに推して考えると，指示対象である「金星」に該当するのが「出来事」であろう。客観主義的な立場では次の能動文と受動文を「同じ意味」の文として捉えている。

（6）　a．国語審議会は「ら抜き言葉」を認めなかった。
　　b．「ら抜き言葉」は国語審議会に認められなかった。

客観主義的な立場は，すなわち「国語審議会が「ら抜き言葉」を認めなかった」という事実上の出来事を「意味」としているのである。一方，認知言語学的な立場では，（6）の2文は違う認識に基づいた表現であり，したがって意味も違うと考える（西村1989）。また，しばしば引き合いに出される例に「日が昇る／沈む」があるが，これは地球の自転という客観的事実を述べておらず，話者の認識を表している。すなわち，文の意味を客観的事実に求めると不整合もでてくると言える。また，言葉の意味は言語認知内で捉えるべきだと思われる。

このような意味は形式が規定するという考え方に基づくと，George Lakoff（1987）らが行っているメタファーの認識研究へと進展する。

（7）　a．The painting is **over** the mantle.（その絵は炉棚の上にある。）
　　b．The plane is flying **over** the hill.
　　（その飛行機は丘の上を飛んでいる。）
　　c．Sam is walking **over** the hill.
　　（サムは歩いて丘を越えようとしている。）
　　d．Sam lives **over** the hill.（サムは丘の向こうに住んでいる。）

e. Harry still hasn't gotten **over** his divorce.

（ハリーはまだ離婚の痛手から立ち直っていない。）

f. Pete Rose is **over** the hill.

（ピート・ローズはもう盛りを過ぎている。）

（ゴチは筆者）

これらの文で使われる *over* はいくつかのスキーマに基づき意味が拡張している（上掲書）と認知意味論的に分析される。例えば，（7 c）と（7 e）は「障害物を垂直なLM（ランドマーク）として，また，人生を旅と見なすメタファーにより同じスキーマに基づいている。（7 d）と（7 f）は「仕事というものを丘のように垂直と水平の両方向にのびたLMを越えて行く旅として理解するメタファーを利用して」同じスキーマに基づいていると考えられている。

本稿でも補助動詞は本動詞と同一形式であると捉え，本動詞の意味が補助動詞になってもどのように維持され，あるいは変容，消失しているのかという観点から分析を行いたい。

1.2 孤立系と文脈相互作用

さて，本稿では一般論として「形式が意味を規定する」とした。今度は一形式が持つ意味についての前提を述べると，「実際使用においてはある語が置かれている文脈がその語の意味に相互作用を及ぼす」という基本的理念を示しておきたい。「実際使用においては」と断ったのは，実際使用での意味と文脈から切り離された状態での意味を区別するためである。ある言語形式が文脈から完全に離れた状態，言い換えれば意味を文脈からの干渉を受けずに一語で思い浮かべる場合の意味と語が文脈に置かれ，文脈の干渉を受けた状態での意味を区別しようと考えたいのである。いわば，動詞の「不定形」と「定形」の関係と似たようなことを意味レベルでも考えたいのである。この文脈から相互作用を受けない状態を「孤立系」と呼ぶことにする[(1)]。筆者の今までの意味分析にはこの「孤立系」の概念は導入していない。意味の取り扱いをより精緻にしたく，導入した。なお，ここで言う「文脈」はかなり広義に使っている。孤立系と文脈相互作用に関しての論考は別稿に期したい。

1.3 分析方法

本稿では意味連関の構造を調べるために，例文データを用例に応じてクラスターに分類し，それぞれの意味分析を行い，それを意味成分で示し，クラスター間の連関性を検討するという手順を踏む。その際，上で述べた「孤立系」の意味との関係を中心に考察していきたい。

では，以下動詞イク・クル・ミル各語の意味を本動詞と補助動詞に分けて分析し，その後

統合的に考察することにしよう。

2.　動詞イクの分析

本節では動詞イクについて分析を行う。本動詞用法，補助動詞用法，統合的分析の順で述べていく。イク・クルはあわせて論じられるのが常であり，またそうすることにより問題点を明らかにしやすいが，ここではまず別々に分析し，第5節でもう一度ペアとして考察することにする。なお，～テイク・～テクル形式については，～テイク・～テクル形式を採る文例すべてが補助動詞と認められるか，あるいは本動詞と補助動詞の両方であるとするかは議論の必要なことであるが[(2)]，本稿では便宜的に～テイク・～テクル形式は補助動詞と呼ぶことにする。

2.1　本動詞用法のイクの意味

イク・クル・～テイク・～テクルに関しては先行研究でも空間移動，アスペクトの観点から詳しく考察されている。本動詞用法イクについては森田（1968，1977）に詳しく記述されている。本稿でもこれを踏まえ考察していきたい。

2.1.1　イクの用法

動詞イクが空間移動を表すのを原義とするのには異論がないだろう。まず森田氏のイクに関しての論考を取り出し，まとめると以下のようになる。

（8）　a．場所的移動「……ガ……カラ……ヘ（ニ／マデ）……ヲ行く」
　　b．届く「……ガ……カラ……ヘ行く」
　　c．通じる「……ハ……ヘ行く」
　　d．通行，往来「……ヲ行く」
　　e．到達「……ガ……マデ行く」

これらのタイプにはそれぞれ次のような例文が当てはまる。

（9）　a．①私は毎日大学へ行く。②アポロが地球から月へ行く
　　b．電報，行きましたか
　　c．新しい地下道は淀屋橋駅へ行く
　　d．センター街を行く人々に笑顔が戻った
　　e．母の病気は医者が見放すところまで行っていたのに，民間療法で治った。

これらの分類の他にイクには次のような例もある。

(10) a．A：もう一杯いきませんか。まだいけるでしょう。
　　B：もうこれ以上はダメです。いけません。
　b．主人は入院して3日目に逝ってしまいました。
　c．しめしめ，うまくいった。
　d．にっちもさっちもいかない。
　e．アメリカの家は広い。そこへいくと日本のは本当に兎小屋だ。

(10a)は「飲む」というニュアンスで使われており，(10c)とともに仮名書きがふつうである。仮名書きであることは本来の意味があまり意識されなくなったことを表していよう。また，(10b)は「行く」よりも「逝く」あるいは「往く」を当てるであろうが，行クと同じ語として認知されると言っていいだろう。事実，辞書では同項目にいれられている。

2.1.2 本動詞イクの意味

まず，動詞イクを文脈から切り離した孤立系の意味を考えると，「～が～から～へ移動する」ということになろう。そこには(11)で示す5つの意味成分が含まれよう。

(11) イク孤立系の意味成分
　＜移動＝人＞
　＜起点＝自己側地点＞
　＜着点＝非自己側地点＞
　＜経路＝空間＞
　＜方向＝遠心＞

森田（上掲書）や久野（1978）が述べているように，視点がこの動詞には重要なポイントになることは間違いがない。本稿では視点については＜方向＞＜起点＞＜着点＞の制限に組み入れることで説明を行いたい。つまり，「自己側」としているのは視点がそこに置かれるということである。＜経路＞については，Jackendoff（1983）は概念構造のうち FROM(x), TO(y) をあわせ，「経路（PATH)」という概念（PATH(x, y)）を提出したが，ここでは＜起点＞＜着点＞と並列して＜経路＞をたてたい。

次に(11)が文脈内で相互作用を受ける用例について見てみよう。(8a)(9a)を考えると次のようになる。なお，「ホームベース」は大江（1975）によるもの[3]で，本稿でもこの概念を援用する。大江氏によるとホームベースとは基本的には話し手側というべきもので，拡大使用も可能である。拡大使用という点において「自己側」の規制が緩くなるのでこれを用い

たい。

(12)　(8 a)移動（(9 a)①私は毎日大学へ行く　　②アポロが地球から月へ行く）
<移動＝発話者，物>
<起点＝ホームベース地点>
＊<方向＝中立>のときはこの制限がはずれる
<着点＝非ホームベース>
<経路＝空間>
<方向＝遠心／中立>

①は発話者である「私」が（家から）大学へ空間移動することであり，②は宇宙船が地球から月へ空間移動することである。<移動>は「人」を明示しなくてもアポロ宇宙船という「物」でも可能であるが，この用法では「乗物」など「人」のメタファー的拡張を表せ得るような場合に限り「動物」「乗物」などになる。<起点><方向>の制約がとれて中立的な表現も可能であるが，<着点>がホームベースになることはない。
(8)(9)の他の例文も見てみよう。

(13)　(8 b)届く（(9 b)電報行きましたか）
<移動＝通信・通報>
<起点＝(ホームベース)>
<着点＝非ホームベース>
<経路＝通信路>
<方向＝遠心／中立>

手紙などはホームベースからでもいいのだが，電報など施設に依頼して送る場合や中立的な言い方の場合はホームベースの制約がとれる。

(14)　(8 c)通じる（(9 c)新しい地下道は淀屋橋駅へ行く）
<移動＝痕跡>
<起点＝ϕ>
<着点＝非ホームベース>
<経路＝空間>
<方向＝遠心／中立>

国広（1985）では「痕跡認知」について述べられているが，(8 c)の例は具体的移動物がないにも関わらず，あたかも移動した着点があるかのようであり，この痕跡認知の例と言えよ

う。「この道は駅まで行っている」などの例でホームベースを起点にすることもできるが，この用法では中立的な使い方も可能である。

(15) (8 d)通行，往来((9 d)センター街を行く人々に笑顔が戻った)
<移動＝人，乗物>
<起点＝ϕ>
<着点＝ϕ>
<経路＝道路，通路>
<方向＝遠心／中立>

上の通行，往来のヲは上述の Jackendoff (1983) がいうところの<起点>と<着点>を合わせた「経路」を表しているといえよう。「？広場をあっちこっち行く人がいる」など経路のないものはいいにくくなる。ただし，この場合の起点と着点は厳密な位置づけはない。また，方向も左右方向も許され，必ずしも遠心とは限らないが，「？こっちに向かって通りを行く人々」など求心であることはない。

(16) (8 e)到達((9 e)母の病気は医者が見放すところまで行っていた)
<移動＝(病気の状態という)事態>
<起点＝ϕ>
<着点＝非ホームベースの状態>
<経路＝観念的進行の経路>
<方向＝遠心>

この例では経路は観念的に持っている病気の進行の道筋といえるが，<起点>は常態とは限らず特に意識されない。<着点>は通常でない状況である。次に(10)の用法の意味を考えたい。

(17) (10 a)もう一杯いきませんか。まだいけるでしょう。
<移動＝(飲酒)行為>
<起点＝通常(しらふ)状態>
<着点＝限界点>
<経路＝酔いにいたる経路>
<方向＝遠心>

飲酒行為は限界へ向かっての道のりと認識されているようである。従って，Bさんは「もうこれ以上いけない」限界点に達していると言っているのである。ここから限界に関係のない

単なる「飲む」の言い換えとしてはイクが用いられないことになるのであろう。

(18)　(10 b)主人は入院して3日目に逝ってしまいました。
<移動＝生命>
<起点＝この世>
<着点＝あの世>
<経路＝あの世への旅立ちの道程>
<方向＝遠心>

(18)の意味成分は比較的孤立系の意味成分から把握しやすい。<移動>を生命とするか魂とするかは死生観などとも関わっているが，イメージはこの世からあの世への旅立ちである。

(19)　(10 c)しめしめ，これでうまくいった。
<移動＝事態>
<起点＝ϕ>
<着点＝達成状態>
<経路＝事態の進展の道筋>
<方向＝遠心>

(17)や(19)の場合，<移動>に具体性がなくなり，経路が観念的になっている。(10 d)「にっちもさっちもいかない」も(10 c)ともに，事態の進展を経路とする表現であろう。(10 e)「そこへいくと」は前文の話題の内容を着点とする観念的な言い方である。

本動詞用法では孤立系の意味成分からの派生を考察した。次に補助動詞用法を見てみよう。

2.2　補助動詞用法～テイクの意味

本節冒頭でも述べたように，～テイクはすべて補助動詞と呼ぶべきか，本動詞と補助動詞とに分けるべきか議論のあるところである。それは，～テイクに空間移動を表す用法があるからであり，先行研究では空間移動の～テイクとアスペクトの～テイクを分けて考えている場合が多い。本稿では～テイク形式で現れるものを便宜上補助動詞と呼んでいるが，これは～テイクの空間移動を表す用法が本動詞から転移されたことを無視したものではもちろんない。

ただ，1つ考慮に入れておきたいことがある。吉川（1976）で継起的動作の～テイクとして次の例が挙げられている。

(20)　村からやさいをうりに来た人たちも，いろいろなものをかっていきます。

この～テイクは(21)のネルと同様の補助動詞ではない地位を与えている。

(21)　ごはんをたべてねる。

考慮に入れたいのは(20)と(21)とでは音韻的に違いがあるのではないかということである。

(22)　a．途中でケーキを買っていきます。
　　b．途中でケーキを買って，行きます。

(22b)は明らかに本動詞であるが，それに対して(22a)は「買って（い）きます」のように連音する場合があるので，(22b)と全く同じ地位は与えにくいと考えられる。これは本動詞，補助動詞の規定に関わることなので，さらに考察の必要があると思われる。

さて，本節では時間移動は空間移動からの写像であるとの考えから，まず空間移動を表す用法について見ていくことにする。空間移動を表す用法を含め，先行研究ではいくつかの分類が示されている（森田（1968，1978），吉川（1976），成田（1981），近藤（1985），森山（1986）など）。本稿は意味の抽象化過程を探るという目的から，より具象的かより抽象的かという意味上のスケールを中心に用例を分けた。まず場所的移動を表すクラスターには次のような例がある。

(23)　a．研究室が留守だったのでメモを残していった。
　　b．ここで水を補給していこう。

これは順次性の移動（森田（1978））と呼ばれるもので，ある地点で前項動詞の行為をし，空間移動するものである。本動詞の場合同様，移動主体のメタファー的表現も可能である。意味成分を示すと次のようになろう。

(24)　順次性の移動
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

次に同じく移動で平行性・状態性・複合動作（森田（前掲書）による）を表す例と意味成分を順にあげていく。まず，継続動作を表す意思性の他動詞に付く平行性の移動である。これは「継続動作を表す意志性の他動詞に「いく・くる」が付いたもの」で「両行為は同じ目的から発せられている」とする。

(25)　a．駅まで乗せていってやるよ。
　　b．明日その本を持っていきます。

(26)　平行性の移動の意味成分
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

第2に継続の自動詞につく状態あるいは手段を表す用法を示す。「移動の動詞に付けば手段を，その他の動詞に付いた場合は状態を表すことにな」り，「「いく・くる」の付加によって方向性帯びる」（同上書）のである。

(27)　a．寝坊して駅まで走っていった。
　　b．電車の中，座っていけるといいね。

(28)　状態性の移動の意味成分
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

第3に方向性を持つ移動動詞に付く用法を示す。

(29)　a．大急ぎでうちを飛び出していった。
　　b．お化け屋敷にはいっていった。

(30)　複合動作の移動
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝(ホームベース)＞
　　＜着点＝非ホームベース＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝遠心／中立＞

このように移動を表す用法は基本的に同じ意味成分を有している。というのは，上のクラスター分けの根拠は前項動詞の性質によるもので，～テイクの部分に関しては移動を表してお

り，意味上の差異が微細であるからである。空間移動の場合，当然ながら経路は空間になる。

今度は空間移動から時間移動に目を転じてみたい。ここでも森田氏に従い分類を提示する。まず，時間的継続から例を示す。

(31) a．どうやって暮らしていくの。
　　b．年齢を重ねていく。

これらの用法の場合，経路が時間軸になる。そして時間軸上を移動するのは「事態」になる。すなわち，事態の推移を表すのである。時間軸上のホームベースは基本的には「現在」になり，非ホームベースは「未来」になる。

(32) 時間的継続を表す意味成分
　　＜移動＝事態＞
　　＜起点＝ホームベース（現在)＞
　　＜着点＝非ホームベース（未来)＞
　　＜経路＝時間軸＞
　　＜方向＝遠心＞

次に変化を表す用法である。これは「自然発生的現象を表す無意志性の動詞に付いたときに生じ」るが，意志性の動詞に付いたときもあり，そのときには「話し手の手の届かぬところでなされる行為の場合に限られる」（同上書)。

(33) a．みるみる顔が青ざめていった。
　　b．夜が明けてきた。

(34) 変化を表す用法の意味成分
　　＜移動＝事態＞
　　＜起点＝ホームベース（現在)＞
　　＜着点＝非ホームベース（未来)＞
　　＜経路＝時間軸＞
　　＜方向＝遠心＞

空間移動に対し，移動の経路が空間地点を結ぶ軸から時間軸に写像され，抽象化している。

2.3 統合的分析

本動詞用法で＜移動＞するのが＜人＞から＜乗物＞へと変容するのはメトニミーによる説明が有効であろう。すなわち，人は乗物の一部であり，人を乗せた乗物が＜移動物＞になる

のである。また，<行為><事態>への転移は行為，事態とも「何ヲシタ」「何ガ起コッタ」など「何」で認識されることにより，人や物からの写像が容易なのであろう。またこれは受給動詞などでは補助補助用法になってから現れる転移であるが，イクは本動詞用法で意味の抽象化が見られることが特徴的である。

本動詞イクと補助動詞～テイクの意味の連関についてはすでに，空間から時間軸への転換であることは指摘されている（寺村（1984）等）。その際<移動>するのが，<人>から<行為><事態>に変化するのは2.1および2.2で見てきた通りである。上述したとおり，これはすでに本動詞にも見られる意味変化であるので，本動詞からスライドしたと言えそうである。

次節ではイクとのペアの語であるクルについて考察してみよう。

3.　動詞クルの分析

本節では動詞クルの意味分析を行う。考察の順序は第2節と同様である。

3.1　本動詞用法クルの意味

3.1.1　本動詞クルの用法

本動詞イクと同様，まず森田氏による分析をまとめ以下にあげる。

(35)　a．移動「……ガ……カラ……ヘ（ニ／マデ）……ヲ来る」
　　b．届く「……ガ……カラ……ヘ来る」
　　c．通じる「……ハ……ヘ来る」
　　d．到達「……ガ……マデ来る」
　　e．到来「……ガ来る」
　　f．出現，生起「……ガ……ニ来る」
　　g．由来，起因「……ガ……カラ来る」

これらに対応する例文は次の通りである。

(36)　a．お客さんがうちにたくさん来た。
　　b．実家から小包が来た。
　　c．この地区にもやっとガスが来た。
　　d．怒りが頂点まで来たとき，脳溢血で倒れた。
　　e．原稿の締め切り日がすぐそこまで来た。
　　f．そんなに無理すると，体の弱いところに来るよ。

g．この肝炎はストレスから来たのでしょう。

この他に次のような例が挙げられる。

(37) a．頭にきた。
b．体にがたが来る
c．この顔にピンときたら110番
d．チョコレートときたら目がない
e．理屈でこられたらかなわない

3.1.2 本動詞クルの意味

本節でも孤立系の意味成分からたてていきたい。クルは「〜が〜から〜へクル」であるので，意味成分として<移動><起点><着点><経路><方向>がたてられる。これに視点の制約を<着点><方向>に加えると(38)になる。

(38) 動詞クルの孤立系の意味成分
<移動＝人>
<起点＝非自己側地点>
<着点＝自己側地点>
<経路＝空間>
<方向＝求心>

次に文脈で相互作用を受けた文を(36)であげた用法別に見てゆこう。

(39) 移動 (36a)お客さんがうちにたくさん来た。
(40) <移動＝人>
<起点＝非ホームベース地点>
<着点＝ホームベース地点>
<経路＝空間>
<方向＝求心>
(41) 届く (36b)実家から小包が来た。
(42) <移動＝通信・通報>
<起点＝非ホームベース>
<着点＝ホームベース>
<経路＝通信路>

＜方向＝求心＞

この場合，＜起点＞＜着点＞は空間地点だが，＜経路＞は通信経路へと抽象化する。

(43)　通じる　(36 c)この地区にもやっとガスが来た。

(44)　＜移動＝物＞
　　＜起点＝ϕ＞
　　＜着点＝ホームベース＞
　　＜経路＝設備普及路＞
　　＜方向＝求心＞

これは経路としてガス設備の普及路を観念的に認知した例になろう。

(45)　到達　(36 d)怒りが頂点まで来たとき，脳溢血で倒れた。

(46)　＜移動＝感情の状態＞
　　＜起点＝ϕ＞
　　＜着点＝終点＞
　　＜経路＝感情の進行経路＞
　　＜方向＝ϕ＞

この場合，観念的・経験的に上下動の経路を捉えており，着点は経路の終点と考えられる点になり，通常的でなくなることになる。

(47)　到来　(36 e)原稿の締め切り日がすぐそこまで来た。

(48)　＜移動＝時点＞
　　＜起点＝非ホームベースの時点＞
　　＜着点＝ホームベースの時点（現在)＞
　　＜経路＝時間軸＞
　　＜方向＝求心＞

この用法では＜移動＞は時点である。通常は時間軸上を人間や事態が推移していくのだが，時間軸上を時期が向こうから求心的に移動してくるという認知も行うときがある。

(49)　出現，生起　(36 f)そんなに無理すると，体の弱いところに来るよ。

(50)　＜移動＝状態＞
　　＜起点＝ϕ＞
　　＜着点＝ホームベース＞

＜経路＝観念的進展の経路＞
＜方向＝求心＞

「肉体・精神的現象が「が」格にたつ場合が多く」,「肉体・精神的現象以外の事柄が生起主体となる場合は，生起する場所を「に」格で表す」(森田（同上書))。(49)であれば痛みなどが外から体というホームベース側に移動すると認識していると考えられる。

(51)　由来，起因　(36ｇ)この肝炎はストレスから来たのでしょう。
(52)　＜移動＝事実・状態＞
＜起点＝原因＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝因果＞
＜方向＝求心＞

格助詞カラは空間の起点を表すのに対し，接続助詞カラは理由を表すという写像転移があるが，これとパラレルの現象が(51)である。(52)の場合は＜着点＞が体というホームベースである。「平成不況は経済政策のまずさから来ている」の例では＜着点＞が現状で，経路は因果である同様の用法である。

(37)の例については文字通りの意味から派生している用法で，それぞれ次のように分析されよう。

(53)＝(37ａ)（頭にきた）
＜移動＝事柄の影響＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース＞
＜経路＝出現の経路＞
＜方向＝求心＞

(53)は「ある事柄の起こす影響が間接的に自分の頭に来」て感情を害することである。

(54)＝(37ｂ)（体にがたが来る）
＜移動＝事柄＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース（身体)＞
＜経路＝観念的進展の経路＞
＜方向＝ϕ＞

これは(49)(50)の出現，生起の用法に当たる。<着点>の身体は中立的にも用いられる。

(55)＝(37ｃ)（この顔にピンときたら110番）

<移動＝事柄（感情）>

<起点＝ϕ>

<着点＝ホームベース>

<経路＝観念的進展の経路>

<方向＝求心>

これも上の例と同様，「顔を見てピンという感情が起これば」であり，出現，生起の例に含めてもいいだろう。思いつくことなどはホームベースである身体の一部，頭への出現である。

(56)＝(37ｄ)（チョコレートときたら目がない）

<移動＝事柄>

<起点＝ϕ>

<着点＝ホームベース（話題）>

<経路＝話題への出現経路>

<方向＝ϕ>

(57)＝(37ｅ)（理屈でこられたらかなわない）

<移動＝非自己>

<起点＝ϕ>

<着点＝ホームベース>

<経路＝言語伝達経路>

<方向＝ϕ>

ここでは「相手が自分に言語的手段で向かってくる」のが「理屈であれば」かなわないのである。

次に～テクルに目を転じることにしよう。

3.2　補助動詞用法～テクルの意味

次に補助動詞用法を森田氏の分析を手がかりに見てみる。基本的にはイクと同様であるが，(58ｄ)のようにクルにしか見られない用法もある。

(58)　ａ．順次性移動

ｂ．平行性・状態性・複合動作移動

ｃ．時間的継続

ｄ．発生

e．変化

これらの用法について例を挙げながら意味成分を述べていきたい。

(59)　順次性移動（メモを残してきた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース地点＞
　　＜着点＝ホームベース地点＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝求心＞

(59)は～テイクと同様，瞬間動詞につき，空間移動を表す。本動詞クルの空間移動と同様である。

(60)　平行性移動（本を持ってきた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース地点＞
　　＜着点＝ホームベース地点＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝求心＞

(60)は継続動詞を表し意志性の動詞に付く場合である。(61)は継続動作の自動詞に付いた場合である。移動の意に含む運動の動詞なら手段になり，その他であれば移動の様態を表す。＜起点＞に関しては本来のホームベースである「家」から移動していても，現在いる場所の方がホームベースとして強く作用する。

(61)　状態性移動（大西洋を泳いできた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース地点＞
　　＜着点＝ホームベースの地点＞
　　＜経路＝空間＞
　　＜方向＝求心＞

(62)　複合動作移動（出張から帰ってきた）
　　＜移動＝人＞
　　＜起点＝非ホームベース＞
　　＜着点＝ホームベースの地点＞

＜経路＝空間＞
＜方向＝求心＞

～テイクと同様で，上のクラスター分けは前項動詞に基づくものであり，～テクルに関しては本動詞の空間移動と同じになる。

次に経路が時間軸に転移した用法を見てみよう。

(63)　時間的継続（じっと耐えて暮らしてきました）
＜移動＝事態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベースの時点（現在）＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝求心＞

(63)は継続動作についたものである。経験等の継続期間が長いことを表している。

(64)　発生（当時のなつかしい思い出が心にわき出てきた）
＜移動＝状態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベースの感覚空間＞
＜経路＝観念的空間＞
＜方向＝求心＞

(64)の場合，感情の出現を表しており，経路は時間軸ではない。この用法では～テクルによって感情・感覚・アイディア等が無の状態から感覚空間に現れるのことを表現している＜起点＞は自己の外側ということであり，特に指定できない。

(65)　変化（うれしいことに／困ったことに痩せてきた）
＜移動＝状態＞
＜起点＝ϕ＞
＜着点＝ホームベース時間（現在）＞
＜経路＝時間軸＞
＜方向＝求心＞

(65)の用法では変化ゼロ状態から変化が始まることを表している。例文の通り変化についての評価はプラスでもマイナスでも可能である。前項動詞は基本的に無意志性の動詞になる。森田（前掲書）では＜着点＞を話し手の立つ時点と解釈している。経路が時間であることは，

<移動>が状態でもあるので同感であるが，<着点>は話し手の立つ時点であることとは限らないだろう。

また，この他に近藤（1985），張（1992）でも指摘されている用法もある。

(66) a．公園であそんでくる（近藤（1985）より）

b．妻：(掃除中）それよりさっきから邪魔なんだけど，2階行って母の日のことでも調べてきたら？

夫：それは名案ですね，2階に行って調べてきます。

妻：はいはい，一日中調べてなさいな，あー忙し。

張氏が「逆向型」と呼ぶこの用法は，イクにも置き換えられるような方向が逆のように考えられる空間移動の例である。近藤（1985）では「往復動作が含まれるのであり，通常は「あそびにゆく」のように「に」の前の「あそび」が行われるところが「ゆく」の到着点であるのに対し，「遊んでゆく」の場合にはそこが出発点となり逆の関係となるために問題が生じ，（略）従って通常の場合とは異なり，本来の出発点である発話場所が意味上の出発点とならないために「ゆく」と「くる」が逆転する」としている。しかし，(66b)をみると，妻は夫に2階にずっといっていてほしいのであるから「調べにいったら」といってもいい場面であるが，「一日中調べてなさい」とも言っており，なぜ～テクルを用いるかがはっきり分からない。この用法のクルの意味成分を考えると次のようになろう。

(67) 逆向型

<移動＝人>

<起点＝2階>

<着点＝1階>

<経路＝空間>

<方向＝求心>

～テクルによって表される<着点>はやはりホームベース，すなわち現地点であり，この～テクルによりまた戻ってくることを表し，ぶっきらぼうな印象をやわらげる効果があると思われる。

3.3 統合的分析

イクの場合と同様，クルも本動詞用法ですでに抽象化された意味を有している。経路が空間から観念的なもの，時間軸，因果など多様な様相を呈し，本動詞のうちに抽象化がかなり進んでいる。また，補助動詞の場合も，空間移動，時間軸移動，感覚空間への移動と広がっ

ている。空間移動から時間軸への移動は認識上よく行われることである。例えば，指示詞で「その本」が「その時」へ，格助詞「家から学校まで」が「今日から明日まで」などに写像される。また，～テクルの空間移動・時間軸移動の＜経路＞は本動詞からの写像で説明されるだろう。

ここでイクとクル両方を視野に入れて相違点を中心に考察してみよう。イクにはなかった用法でクルには因果を表す用法があった。また，クルには「発生」を表す用法も特徴的であった。これはクルが求心移動を表すことと関係があろう。人間は自分にことがおよぶのには敏感であり，自分の方に事態が向かっていることを表すほうが他に事態が向かったり及んだりするよりも興味が強い。「発生」に関しては自己が占めている空間（具象的でも感情的でも）に発生することを述べるのが中心的な使い方だろう。先の例で「母の病気は医者が見放すところまでいっていた。」は「母の病気は医者が見放すところまできていた。」とも言える。後者の方がより迫った感じになるのは～テクルで悪い状況に視点を置いているからであろう。第5節でも述べるが，求心動詞の方が遠心動詞よりも，抽象化しやすいようである。

では，次に動詞ミルの分析に移ろう。

4.　動詞ミルの分析

本節では視覚動詞であるミルの意味を扱う。まず，先例に倣い，本動詞用法の意味から見てみよう。

4.1　本動詞ミルの用法と意味

4.1.1　ミルの用法

本動詞では以下のような用法がある。

(68)　a．（目を向ける）昨日子どもが「見て見て」というので軒下を見ると大きな蜂の巣があった。

b．（目に留める）テレビで野球を見る。

c．（眺める・望む）眼下に広がる街並みを見た。

d．（目に入る）こわい夢を見た。

e．（占う）手相をみる。

f．（判断する）味をみる。

g．（診断する）脈を診る。

h．（評価する）人を見る目がない。

i．（経験する）馬鹿を見る。

j．（世話をする）子どもの面倒を見る。

k．（調べる）辞書を見る。

これらは3つに大別できるであろう。すなわち，（ア）目で確かめる（a-d）（イ）判断する（e-i）（ウ）物事を調べ扱う（j-k）の3つである。

4.1.2 ミルの意味

ここではまず，孤立系のミルを考えてみたい。ミルの孤立系の意味は上の3つのうちで近いのは(ア)になるだろう。柴田他（1979）にはミル・ナガメル・ミツメルを対比させ，分析している。それによると，ナガメルは広範囲を見ることが可能であり，それに反して，ミツメルはそれは不可能で，「人間自ら注意力を集中して視野を狭め」る動詞である。また，ミルは「認識する」という含みがあると記述している。行為ミルを分解して考えると，ミルとは視界を対象上に移動する行為であるといえる。従って次のような意味成分がたてられよう。

(69) ＜移動＝視野＞
＜起点＝非対象＞
＜着点＝対象＞
≪判断≫

ミルの行為自体は＜経路＞を特に意識しない，＜移動＞＜起点＞＜着点＞で表されようが，見ると当然対象の知覚認識が行われ，それに伴い対象の判別が生まれる。そこで≪判断≫を≪≫で括り，提示したい。これはミルの推論的意味（Nida（1975））である。

(63 a)は孤立系に近いもっとも典型的な用法であり，1回的である。「大きな蜂の巣だった」と認識するのは「軒下に目を遣る」行為とは時間的に若干ずれている。意味成分は以下のようになろう。

(70) 目を向ける（軒下を見る）
＜移動＝視野＞
＜起点＝非対象物＞
＜着点＝対象物＞

(68 b)は視野をテレビに持っていき，＜着点＞に着いた視野をその場に留めておくことまでが含まれた意味である。

(71)　目に留める（テレビで野球を見る）

＜移動＝視野＞

＜起点＝非対象物＞

＜着点＝対象物＞

＊着点到着時から視野がそこに置かれている状態全体を含む

次の場合は対象物に広がりがある場合であるので，視野の移動に範囲が生まれる。

(72)　眺める・望む（眼下に広がる街並みを見た）

＜移動＝視野＞

＜起点＝非対象物＞

＜着点＝対象物＞

＊着点が一点ではない。

「目に入る」は意志的ではない場合である。すなわち＜移動＞が意志的でなくなる場合である。

(73)　目に入る（こわい夢を見た）

＜移動＝視野＞＊意志的移動ではない

＜起点＝ϕ＞

＜着点＝対象物＞

(74)～(77)は推論的意味である≪判断≫が意識される場合である。判断時の背景知識の違いはあるが基本的には同じ意味構造である。ただし，(75)は共感覚（山梨1988）により「味を見る」「調律で音色を見る」など視覚以外にも拡張され得るし，(76)は触覚に拡張されたものである。

(74)　占う（手相をみる）

(75)　判断する（色つやをみる）

(76)　診断する（脈を診る）

(77)　評価する（人を見る目がない）

＜移動＝視野＞＊共感覚により視覚以外の感覚も可

＜起点＝非対象＞

＜着点＝対象＞

≪判断＝対象・視覚情報を経験的知識によって≫

＊共感覚によって視覚以外にも味覚・聴覚等も可。

(78)の経験する，身に受ける，の場合は視覚から離れ，体験内容を判断し，それを例えば「馬鹿」「泣き」と表すのである。この場合の<移動>も意志的であるとは限らない。

(78)　経験する（馬鹿を見る）
　　<移動＝体験>
　　<起点＝ϕ>
　　<着点＝体験>
　　≪判断＝体験した内容≫

(79)の場合，やはり視覚的な行動がまずあって，その対象を経験的知識によって判断しているものである。

(79)　世話をする（子どもの勉強を見る）
　　<移動＝視野>
　　<起点＝非対象>
　　<着点＝対象>
　　≪判断＝対象を経験的知識によって≫

(80)も同様視覚的行動により，対象から知識を得ることを表す。

(80)　調べる（辞書を見る）
　　<移動＝視野>
　　<起点＝非対象>
　　<着点＝対象>
　　≪判断＝必要な知識≫

以上，本動詞ミルの用法と意味を考察した。次項では補助動詞の場合を考察したい。

4.2　補助動詞用法～テミルの意味

補助動詞～テミルについては高橋（1976）による「もくろみ動詞」としての分析や，吉川（1976）の分析などがある。

4.2.1　～テミルの用法

上に上げた先行研究でも述べられているとおり，～テミルには基本的に「ためしにする動作」を表す。下のような用法があげられる。

（81）　ためしにする（食べてみる・考えてみる・お願いしてみる）

また，～テミルト，～テミタラ，～テミレバの形である事実に気づく，あるいはある事実が成立する条件を表すこともある。（これについては長野（1994）に制約についての考察がある。）これは固定化された用法であり，より文法化の進んだ表現であるといえる。

4.2.2　～テミルの意味

本節では～テミルの「ためしにする」の意味を探りたい。上述のより文法化の進んだ用法については稿を改めて論じることにする。

（82）　ためしにする
　　＜移動＝行為＞
　　＜起点＝ϕ＞
　　＜着点＝現実＞
　　≪判断＝経験的知識による≫

行為を現実化することによって判断するのが～テミルの意味であろう。この場合前項動詞の行為を開始することに焦点が当たっている。「ためしにする」の意味に判断が入るのは推論的意味である≪判断≫がより強く意識されたためであろう。

4.3　統合的分析

本動詞用法でも，視覚的ではなくなる場合もあり，この段階で抽象化が行われている。≪判断≫がより優勢になると＜移動＝視覚＞が劣勢になるようである。また，補助動詞用法になると，視覚の意味が薄れてしまい，派生的な≪判断≫の方が優勢になっている。

以上，動詞ミル・イク・クルの意味を分析してきた。以下ではこれらの分析結果をもとにして意味の抽象化過程について検討していきたい。

5.　日本語動詞意味の抽象化過程

本節では上で分析した意味構造に加え，筆者がこれまでに扱ってきた動詞をも含め，意味の抽象化過程，すなわち意味論的に見た文法化の過程について述べていきたい。

由井（1993）で扱ったモラウ，由井（1996b）で扱ったヤル・クレルは視点やダイクシスの動詞として並列的に扱われることが多い。イク・クルとヤル・クレル・モラウを対比すると，まず，＜移動＞は前者は人が中心的であるのに対し，後者は物と所有権が原義である。

より具体的なものが<移動>主体であると，本動詞では主体の抽象化は起こりにくいようである。また，<起点><着点>に関しては前者は地点であり，後者は受け手と与え手という人である。このことも本動詞での抽象化を阻む要因になっていると考えられる。補助動詞用法に関しては，<移動>の主体が人から行為に抽象化する点は同様であるが，受給動詞の場合は，「死んでやる」のように行為の「影響」という間接的なものも移動するが，移動の動詞の場合はこのような例は見られない。さらに，派生的な意味については受給動詞の場合の≪恩恵≫という推論的意味は抽象化に従って薄れていくのに対し，ミルの≪判断≫は抽象化に従って優勢になるのが特徴的である。要因についてはこれからの研究課題である。

6. むすび

以上，動詞イク・クル・ミルの意味分析と抽象化過程についての一考察を示した。イク・クルについては本動詞の段階で抽象化が進んでいること，これは移動主体が人の自動詞であり，メタファー化しやすいのが原因と考えられる。また，ミルに関しては共感覚によって視覚以外にも意味が広がること，≪判断≫という推論によって生まれた意味が抽象化に従って優勢化してくることが分かった。

抽象化全体に関しては，遠心的方向の動詞よりも，求心的方向の動詞の方がより多様な用法を呈するが，これは人間の認知上，自己に向かうことのほうがより興味が強いことによるということだと考えた。

動詞イク・クル・ミルを中心に意味分析を行ったが，分析自体未だ不十分な点もあろうし，これらの語について必ずしもすべての例文を考察できたわけではない。特に，慣用表現となっているものの中には言及できなかったものも多い。今後はこのような例文も含め，研究を進めていきたいと考えている。

注

（1） 國廣（1982）でも「意義素には語の諸用法の特徴を整理抽象したものという側面がある」と述べられており，「孤立系」と通じると思われる。

（2） 近藤（1985），吉川（1976）参照。

（3） 大江氏は Fillmore (1972) "How to Know Whether You're Coming or Going", *Descriptive and Applied Linguistics* 5, ICU からの概念を援用している。

参考辞書類

『現代国語例解辞典』林巨樹監修（1985）小学館

『大辞林第２版』松村明監修　三省堂
『広辞苑第４版』岩波書店
『大辞泉』小学館

参考文献

張麟声（1992）「「イク・クル」フォームに見る日本語の性格――中国語と比較して――」林四郎編『応用言語学講座第４巻知と情意の言語学』明治書院
Givón, Talmy (1979) *On Understanding Grammar*. Academic Press.
Heine, Bernd, Claudi, U. and Hünnemeyer, F. (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. The Univerisity of Chicago Press.
Hopper, Paul and Elizabeth Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
今仁生美（1990）「Ｖテクルと Ｖテイクについて」『日本語学』9-5
Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press.
笠松郁子（1989）「「～してみる」を述語にする文」『教育国語』98
近藤泰弘（1985）「補助動詞「てゆく」「てくる」の用法――＜視点の補助動詞＞研究序説――」『日本女子大学紀要』34
國廣哲彌（1982）『意味論の方法』大修館書店
――――（1985）「認知と言語表現」『言語研究』88
久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.（邦訳　池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論――言語から見た人間の心』紀伊國屋書店）
森田良行（1968）「「行く・来る」の用法」『国語学』75
――――（1977）『基礎日本語１』角川書店
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
長野ゆり（1994）「「～てみる」の用法の一側面――命令形・条件表現をとる「～てみる」の用法について」『現代日本語研究』１
成田徹男（1981）「空間的移動を意味する「～てくる・～ていく」」『人文学報』146　東京都立大学人文学部 pp.（左）1-20
Nida, Eugene (1975) *Componential Analysis of Meaning: An Introduction to Semantic Structure*. Mouton & Co.（邦訳 Noah S. Brannen 監訳　升川潔・沢登春仁訳『意味の構造――成分分析』研究社出版）
西村義樹（1989）「意味と文法――Cognitive Grammar の展開(１)」『実践英文学』35
大江三郎（1975）『日英語の比較研究――主観性をめぐって――』南雲堂
Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt Brace and Jovanovich.（邦訳　泉井久之助訳（1957）『言語――言葉の研究――』紀伊國屋書店）
柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進・浅野百合子（1979）『ことばの意味２辞書に書いてないこと』平凡社
高橋太郎（1976（1969初出））「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書

房
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会
———（1995）『認知文法論』ひつじ書房
吉川武時（1976（1971初出））「現代日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
———（1975）「「～てみる」の意味とそれの実現する条件」『日本語学校論集』2
由井紀久子（1990ａ）「受給動詞の意味」『STUDIUM』17
———（1990ｂ）「受給動詞の運用——オマエニクレテヤル・(サ)セテモラウについて——」『日本学報』9
———（1993）「モラウの意味的抽象化・希薄化の過程」『阪大日本語研究』5
———（1995ａ）「動詞オクにおける意味の抽象化過程」『阪大日本語研究』7
———（1995ｂ）「～テクダサイと～テホシイと～テモライタイ——依頼の表現——」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上)』くろしお出版
———（1996ａ）「動詞シマウの意味の抽象化過程」『小泉保教授古稀記念論文集』大学書林（印刷中）
———（1996ｂ）「動詞ヤル・クレルにおける意味の抽象化過程」『日本語教育』88（印刷中）

Summary

The Process of Abstraction of Japanese Verb Meanings: An Analysis of Verbs *Iku, Kuru and Miru*

Kikuko YUI

In recent years Cognitive Linguistics which inquires Concept Constructions through the study of metaphor is based on the view that patterns of thoughts reflect language considerably. It introduces the outer knowledge of language besides inner language factors to study it.

This paper analyzes the meanings of Japanese verbs *iku, kuru* and *miru* with integration of main verbs and auxiliary verbs and expands the analysis to the process of extended and abstract usage, which contributes the study of factors in classifying the world with selected words. This paper names the independent meaning of the context Isolated System and prescribes that the meanings are represented under the influence of the context. In observations meanings are classified based on the usage of the words. *Iku* and *kuru* present abstract meaning at main verbs stage. This is characteristic of these verbs comparing *yaru, kureru* and *morau*. Semantic components ⟨Movement⟩, ⟨Source⟩, ⟨Goal⟩, ⟨Path⟩ and ⟨Direction⟩ are set up for *iku* and *kuru,* and ⟨Movement⟩, ⟨Source⟩, ⟨Goal⟩ and additional component ⟪Judgement⟫ for *miru*. Abstract expansion are represented by metaphorical change of each component and emphasis of particular component. Metaphorical changes are caused by adoption of outer language knowledge in some cases.